
らき すた ~恋愛×友情~

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すたゝ恋愛×友情ゝ

【Nコード】

N6308I

【作者名】

桜

【あらすじ】

買い物の帰りに同じクラスの委員長と、遭遇。

家に帰って夕飯すませればなんと、こなたと一緒に風呂入ろう発言！？

第三話「委員長」

「おおゝみんなゝ！さ、上がって上がってゝ」

俺とかがみさんたちはこなたさんの家にきていた。

「なんで、私まで泊まらなきゃいけないのよー」

「えゝ？ほんと嬉しいんでしょ？」

「なっ！！そんなわけ、あるか！！」

「焦る、かがみ萌えゝ」

「まったく！」

「ま、まあまあ・・・二人とも・・・」

ふう・・・かがみさんとこなたさんが会話すると、
長くなるからな・・・。

「じゃ、部屋分けするよゝ」

部屋分けは、くじ引きで分けることになった。
そして、決まったのがこの部屋だ。

俺は2階のあいている部屋。

こなたさんはもちろん自分の部屋だ。

かがみさんとかささんは俺の隣の部屋になった。

「まあ、こんなでいいよね？」

「いいんじゃない？」

「私もこれでいいよ」

「俺も大丈夫」

「じゃ、決まり！！」

無事、部屋が決まり、一階のリビングで一休みすることになった。

「こなたさん、どうしていきなり泊まりなんて考えたの？」

「ん、なんとなく。」

なぬ！？ なんとなくだと！？

って、一人で何をやっている。俺。

そういえば……。

こなたさんも、かがみさんも、つかささんも……。

俺の幼なじみだったよな。

俺には、その記憶が一片もないのだが。

まあ、少しずつ、思い出せばいいか。

時計の針が、午後7時をさす。

「そろそろ、夕飯にする？」

「そうね。夕飯にしましょ。」

「・・・かがみん、なにげに楽しそうじゃん。」

「ああ！？　なんか言ったか？」

「いえ、なにも・・・」

かがみさん……………。

せっかくの美人が台無しです…。

「じゃ、じゃあ、あたしと槇原君は夕飯の支度するから、かがみとつかさは

お風呂入ってて。」

「う、うん。お姉ちゃん、行こう。」

「ふんっ！」

あはは……。

「こなたさん、俺、あんまり料理とか得意じゃないけど？」

「大丈夫！ あたし、料理得意だから！」

こなたさんは頼もしい人だな。

……………オタクっていうのが残念だけど。

「あ、こなたでいいからね！ さん付けは苦手だから！」

「うん……そのうち、呼ぶよ。」

「えっ？なんで？」

なんとなく、今はこなたさんを「こなた」と呼ぶのは、

いけない気がしたからだ。

「んゝ。なんとなく。」

今は、こう言っておいたほうがいいよな。

「そういうなら、こなたさんも、俺のこと潤でいいよ。」

「じゃあ、潤君でいい？」

「うん。いいよ。」

「さて。夕飯は何にしようかな。」

「カレーとかは？」

「いいねゝ！じゃ、カレーに決定！」

とんとん、とんとん……。

野菜を切る音がリビングにひびく。

「あゝ……。」

「どうした？」

「肝心のカレーのルーがない・・・（汗）」

「俺、買ってくるよ。」

「うん。ありがとう！」

たたたたっ。

「潤君。まだ気がつかないか・・・。鈍感系か。でもやりがいあるしね。」

「こなちゃん、今あがつたよ」

お風呂からつかさの声がした。

「うん！おk！」

俺は買い物ですませ、人気のない道を歩いていた。

「なんだ、かんだ、言って、俺は楽しいんだな。みんなといるのが。」

なんか情けないようにも感じるが。

独り言を言っていると・・・。

「あなた・・・えーと、1年B組の、槇原君ですよね?」

「え?そうですけど・・・えっと、どちら様で?」

「これは失礼しました。私は高良みゆきと申します。1年B組の委員長です。」

……。委員長？

俺は記憶を辿ってみる。

ああ！思い出した！！

あの、委員長か……

「で、何のようなんですか？」

「あ！いえ、クラスメイトさんだったので少し挨拶位しなきゃと思つて。」

いい子だな。この人。

「お買い物の途中すみません！また、明日！」

「あ、はい！」

高良さんと別れて俺はこなたさんの家にもどった。

「おつかえりー！！！！！」

こなたさんが出迎えてくれた。

「槇原くん、おかえりー」

「おかえり〜。」

つかさん、かがみさんもおかえりといってくれた。

「ちゃんと買ってきてくれた？」

「ちゃんと買ってきたよ。」

「よしよし。」

ふっ。なんだよ。俺は家来か？

「さあ〜て、つくるよお！」

こなたさんが腕まくりをしながらやる気満々にいった。

「ごちそうさまでした。」

「おいしかったね〜」

夕飯をすませた俺たち。

「んじゃあ、かがみとつかさは部屋でゆっくりしていいよ」

「わかった！」

さて。俺もお風呂にはいらせてもらお……

「ちょっと、待て！！！！！」

「！！！？！？」

こなたさんの、目がきらきら光っている。まずい。

いやな予感が……………。

「潤くん！一緒にお風呂入ろう！！！」

は！？

どういうことなんだ！？

俺は頭の中が真っ白になった。

第三話「委員長」（後書き）

投稿遅れてすみません！

明日は休日なのでいっぱい書く予定です。

よかったら（笑

第四話 「こなたの秘密」(前書き)

えーと、やめるとかいいましたがやっぱりやることにしました。

作者名は r a s u ですが、こちらでは桜です。

まちがえてすみません！

これからがんばります！

第四話 「こなたの秘密」

なな、なんと!?

いや待てよ。

こんなの、冗談だろう。

冷静になれ!

「こなたさん、それは冗談ですよね?」

「なーにいつてんの?本気!」

いやいや。そんなの駄目に決まってる。こなたさんはいつたい何を考えているんだ?

「いや、それは、こなたさんにもいいことじゃないし、え、えーと・
・・・」

「えゝ?ほんとは入りたかったりw?」

ぶっ!!!!!

俺は飲んでいたお茶を吹き出した。

「ほおゝら、やっぱりいゝ」

お、落ち着け。俺。

ここはやさしく断るのではなく、ちょっときつめの方がいいのか?

とりあえず・・・・・・・・

「いや！！いい。　　恥ずかしいだろう！」

うお。我ながら少し失敗だ。

「ww　　かわい〜」

な、なんだと！？　　逆に喜ばれてしまった。

俺の頭の中はぐるぐると、拗れてしまいそうだった。

「とっ、とにかく遠慮しとく！」

「え〜〜〜〜〜！つまんない〜〜〜（>＜）」

そんなこといわれても……

どうすればいいんだ？　全然わからない。

「うー……一緒に入ってくれなかったら、あのこと、いつちやうよ？」

あの事？　　何のことだ？

「あたしと潤君は幼なじみ。小さいころの潤君なんていくらでも知ってるんだよ？」

まさか。　　恥ずかしい過去のことでもいうつもりなのか？

「その通りwよくわかったね！」

くそ……これじゃ逆らえない。逆らえるけど、あとでいかな
な思いをしなければならぬ。

「素直に入ればいいけど？」

……こなたさんは、どうしてそんなことするんだ？

「え？」

だから、どうしてこんな事、わざわざするんだ？

「そつそれは………」

なんだかいいなくなさそうだ。でも、俺はなぜ、こんな事するのか
が知りたい。

「いえない………」

しゅんと、寂しそうにこなたさんは言った。

そつか。無理に言わなくてもいいよ。

「ありがとう。」

<にやっ>

ん！？なんだ？　こなたさんがにやりと笑った。

「引つかかったあ！」

え？ 何が、引つかかった？

「本当はいえるんだけどw ずいぶん、騙されやすいタイプ！w」

な、なんか馬鹿にされてる・・・ような。

き、気のせいだよな。 気のせい気のせい。

「ま、今日はあきらめてあげるよ」

ふう。よかった。 ん？ 『今日は』だって？ ってことは次があると言っこと！？

「そ〜そ〜よくわかったね〜」

なっ。 こなたさん、ひどいな〜・・・

「じゃあ、こなたさん、お風呂はいつてきなよ。」

「お〜」

その後ろ姿を見送りながら、俺は自分の部屋に戻った。

<カポーン・・・>

「はあ・・・・・・・・」

こなたは湯船につかりながら、潤のことを考えていた。

なんで、こつ意地になっちゃう？ イタズラになっちゃう？

どうして・・・・・・・・。

潤君。あたしは、あなたが好き。大好き。

小さいころからずっと。でもね、素直になれないんだ。

この気持ちは本人に伝えなくちゃわかってもらえない。

わかってる。でも、言えない・・・・・・・・。

どうすれば、この気持ち、わかってもらえるの？

伝えなくちゃ。わかってる。

がんばらなきゃね。

「よし、がんばろ！」

湯船の中でガッツポーズをしながらこなたは言った。

「潤君！あがったから、入っていいよ。」

「あ、うん。」

さて、俺も入らせてもらうかな。

<カポーン・・・>

「ふう。」

一日の疲れがゆっくりと抜けていく。気持ちいい。

なんか、さっきのこなたさん元気いっぱいだった。なんかうれしいことでもあったんだろうか？

まあ、いいか。今はゆっくり休もう。

・・・今日はいろいろあったな。 クラスの委員長に
たり、泊まりになっちゃって・

でも、正直いうと楽しかったな・・・。

明日は学校。みんなで登校だ。

さてと、そろそろ出るか。

「こなたさん、あがつたよ」

「早かったねー！さて、楽しい夜の始まりだあ！！！」

な、なんだ？　　なにか、やるのだろうか？　　またもやいやな予感。

「やったあ！！！！！！勝ち」

「負けた・・・・・・・・・・」

現在午後九時。今はみんなでトランプ中。

一回目にもかかわらず俺は負けてしまった。

「くく。カードに書いてある、罰ゲームやってね！」

うげ。なになに、左隣の人を一日王女と呼びましょう。

・・・

！？

左隣の人は・・・・・・・・こなたさん。

「へっへっ今日一日だから・・・・・・・・明日の午後七時くらいまでね」

あゝあ、いやな罰ゲームですこと。明日学校あるのに・・・・・・・・

「ドンマイ。」

ポンとかがみさんが肩をたたきながらそう言った。

明日の七時までの辛抱か。我慢しないと。

「じゃあ、そろそろ寝よう」

「えゝ、つかさ、もう眠いの？」

「さっきからあくびしてばかりだし><」

つかささん、眠くなるの早い。俺はまだ全然眠くないんだが。

「もう、つかさ、先に寝てなよ。」

「はい。ふあゝ」

おつきな、あくびをした後、つかささんは二階に上がっていった。

「で、何する？もっかい、ばば抜きする？」

うーん、普通のトランプも飽きてきたし、UNOとかは？

「お！いいねえ」 かがみんはおk？」

「あ、別にいいわよ。」

「じゃあ、決定ー！」

俺、最近まで、UNOのやり方いまいちわかんなかったんだよな。

でも、弟（詳しくは後書きで）に教わったのだ。

なんか、情けない気がするけどまあ、いいや。

「あたしからねー！」

こなたさんが元気にいった。

午前七時。持参した目覚まし時計が鳴る。

<ジリリリリリッ>

「ふあー……もう朝か。」

昨日は遅くまで、こなたさん、かがみさんとゲームしていた。

もう少し早く寝ればよかったな……

「おい！みんな、朝ご飯できたよ！」

一階から、こなたさんの声が聞こえてくる。

「わかった。今行く！」

俺はそう返事して、一階に降りた。

「あれ？かがみとつかさは？」

こなたさんが聞いてきた。

「かがみさんは、今つかささん起こしてるよ。」

「あゝ・・・つかさ、よく寝坊するもんね。」

そうなんだ。

意外だな。しっかりしたお姉さんがいるんだし寝坊しないタイプかな、って思ってたけど。

「意外にそうじゃ、ないんだよね・・・」

ほう。

「あのさ、あたし・・・」

こなたさんが何か言いかけたその時。

「ごめん！つかさ起こすのに時間がかっちゃって！」

そこにはかがみさんとまだ眠そうなたつかささんがそこにいた。

「・・・じゃあ、ご飯たべよつか！」

ちよつと寂しそうな顔だったけど、元気にこなたさんは言った。

なんか、あったのかな。こなたさん。じゃなくて・・・王女か。

第四話 「こなたの秘密」(後書き)

今回はできるだけ長く(?)しました！

途中の弟のことですが、プロフです！

槇原龍一。中学一年生。

好きなもの ゲーム。 嫌いなもの 勉強

んまあ、こなたと似てますねw

でわ、次回でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6308i/>

らき すた～恋愛×友情～

2010年10月20日17時21分発行